徳島県立博物館

博物館ニュース

No.57

遮光器土偶　（青森県大畑町二枚橋(2)遺跡出土）

いかり肩で、ひざを強く踏ん張っており、胴は細く乳房も小さく表現されています。顔は大きく、写実的な鼻と遮光器状の目が強調されています。頭のいただきと後ろに突起がつけられていますが、後ろの突起は髪を巻きつけてまとめているようにも見えます。体のところどころに赤色顔料が残っていますが、もとは全体に塗られていたようです。

土偶は、ほとんどのものが女性をかたどっていて、自然の恵みや子孫繁栄などを祈願したものと考えられています。この土偶は、青森県亀ヶ岡遺跡や岩手県手代森遺跡から出土している王冠状の装飾を持つ典型的な遮光器土偶に比べると豊満さがなく、やや新しい時期のものです。

本資料は、平成17年春の企画展『縄文の美－亀ヶ岡文化の世界－』において、東北地方の縄文時代晩期に栄えた亀ヶ岡文化を紹介する資料のひとつとして展示するものです。企画展では土偶のほかにも亀ヶ岡文化のさまざまな遺物を展示する予定です。

また、亀ヶ岡文化と本県出身の歴史学者喜田貞吉との縁についても紹介します。

（考古担当：高島芳弘）

ムスタン～風の谷へ花々を求めて～

茨　木　　靖

昨年、海外学術調査に参加し、ヒマラヤの懐（ふところ）の国ネパールのムスタン地方の植物を調べに行ってきました。ここではムスタンの環境とそこで見られる花をいくつかご紹介します。

風のムスタンへ

亜熱帯の町、ポカラから飛行機で30分。緑の森を越え、巨大なヒマラヤ山脈の谷をぬって、いよいよムスタンに入る切り立った谷間を抜けた瞬間、あたりは一面の茶色い世界になってしまいました。まさに別世界。この地はインド風と呼ばれる強く乾いた風の影響で全土がカラカラに乾いています（図1）。厳しい環境ですが、川沿いには人々がオオムギやソバを作って暮らしています（図2）。

図1　カラカラに乾いた大地。沢筋だけに村が見える。

とげだらけ

ムスタンの山を歩いてすぐに気付くのは棘（とげ）のある植物がとても多いということです。特に多いのがマメ科のカラガナ（*Calagana*）の仲間（図3）。サボテンのような鋭い硬い棘がびっしり生えていて、さながら“針の山”です。この他、棘に覆（おお）われたバラ科（図4）やメギ科の植物も多く見られました。

図2　畑ではチッベト系の人々がオオムギやソバを作って暮らしている。

図3　マメ科のカラガナ（*Calagana*）のなかま。まさに棘だらけ。

図4　バラのなかま。非常に多く見られた。

変わった形

厳しい乾燥と低温の影響か、中にはとても変わった形になった植物もあります。薄い酸素に息を切らせ4500mほどの頂きに立った時、まわりには、まるで月面基地のような、半球形に縮まった植物たちが覆う奇妙な景観がありました(図5)。この他、植物体が縮まって玉状になったものなども見られました(図6)。

図5　ナデシコ科のノミノツヅリのなかま。

図6　サクラソウ科のトチナイソウのなかま。葉や茎が縮まって丸くなっている。

カルカ～砂漠の中の花園～

カラカラに乾いたムスタンですが、沢筋などにはカルカと呼ばれる湿地(図7)が広がっています。まさに砂漠のオアシスと言えましょう。サクラソウ属(図8)、シオガマギク属(図9)そして美しいランの仲間(図10)などが咲き乱れ、乾燥地の植物とはまるで違うのに驚かされました。

図7　カルカで採集するシェルパ族のスタッフ。

図8　サクラソウのなかま。ヒマラヤには種数が多い。

図9　シオガマギクのなかま。これもヒマラヤには種数が多い。

図10　ウチョウランのなかま。カルカの中ではとても多かった。

こうして無事に調査を終え、たくさんの植物標本を得ることができました。現在データの整理中ですが、いずれ皆さんのお目にかけたいと考えています。

(植物担当)

館蔵品紹介

徳島藩大森羽田出陣絵巻

1853年（嘉永6）、アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航し、徳川幕府に開国を要求しました。幕府は諸大名を動員し、大森・品川・鉄砲洲などを警護しました。ペリーの退去後、幕府はその再航に備えて、再び諸大名を動員し、江戸湾を囲むように、浦賀・大森・品川・羽田・安房・上総などの各沿岸を厳重に警護しました。翌年の安政元年、ペリーの再航にあたって、徳島藩は幕府の命を受け、江戸の要衝である大森・羽田地区を警備しました。この地区は、従来、彦根藩主井伊掃部頭直弼が警備を担当していましたが、京都の治安が悪化したことにより、直弼が京都守護に任じられたため、その後任として、徳島藩がこの地区の警備を担当することになりました。この警備のため、出陣する徳島藩の行列を描いたのが、今回紹介する「徳島藩大森羽田出陣絵巻」です。

絵巻の作者は藩の鉄砲足軽の原一介（鵬雲）で、実際に出陣する行列のようすを藩の陣屋で粗写したことが絵巻の奥書に記されています。徳島藩はこの警備にあたり、その拠点として、大森に陣屋を建設しました。絵巻は、その大森陣屋から羽田方面に出陣する徳島藩の部隊を描いたものです。

以下、この絵巻によって、異国船警備における徳島藩の部隊の構成をみてみましょう。部隊は、大きく分けて、前列の実戦隊、中列の陣営隊、後列の指揮隊に分かれ、部隊は約570人で構成されています。

前列の実戦隊は、鉄砲組・組士隊・長柄組・原士隊で構成されています。これらの部隊は、野戦大筒2門をはじめ、洋式銃や10匁火縄銃などの火器を装備しています。この部隊で特に注目されるのは、幕府から借用した調練用の大筒2門を装備し、さらに農業兼営の兵士である原士30人が動員され、うち20人が「トントロ筒」と呼ばれた洋式銃を装備していることです。諸外国との通商条約が結ばれる以前において、すでに徳島藩が洋式銃を装備していることは、たいへん注目されることです。中列は、実戦隊を後方から支援する陣営隊で、武具方、小荷駄役の夫方奉行、建築工事役の繕奉行、医師などから構成されています。この中列の最後部には、異国船警備について、幕府との交渉や連絡を担当する江戸留守居役が派遣されています。後列は、異国船警備の総指揮を司る家老の蜂須賀八之丞の指揮隊です。八之丞は、ほぼ行列の最後部を殿として進み、長い行列を統率しました。

原一介は、のち1861年（文久元）、徳川幕府が派遣した欧州修好使節団に賄方として随行しました。この時、欧州で撮影した原の写真が残っています（『写真集 甦る幕末-ライデン大学写真コレクションより-』）。

以上のように、この絵巻は、ペリーの２度目の来航による徳島藩の異国船警備部隊の構成を詳しく知ることができる興味ある資料です。今後、部門展示などで紹介し、広く活用したいと考えています。

（歴史担当：山川浩實）

図1　野戦大筒を引く鉄砲隊

図2　洋式銃と10匁火縄銃で装備した原士隊

速報

アゼオトギリの群落発見

アゼオトギリは田の畦などの日当たりの良い湿った場所に生えているオトギリソウ科の多年草です。サワオトリギリやナガサキオトギリによく似ていて、茎が根元から分かれて地面を這い、葉の周辺に黒点がたくさん付きます（図1左）。平地に生え、葉柄は無いか、ごく短く葉の付け根が茎を抱いているように見え（図1右）、花弁に黒点が有る（図2）ことでサワオトリギリなどとは区別できます。本州の関東以西、四国、九州に分布しますが、全国的に減少しており、徳島県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類に、環境省では絶滅危惧ⅠB類になっています。

県内では、神山町、吉野川市（鴨島、川島、山川）、徳島市などに記録があります。相生町、穴吹町で生育が確認されていますが、いずれも数個体しか見つかっておらず絶滅が危ぶまれています。鳴門市では工事によって絶滅してしまいました。徳島県植物研究会会長の木下覺氏によると、石井町に大きな群落がありますが、建物の裏側という人工的な環境とのことです。県内ではその名の通りの田の畦という環境でアゼオトギリの花盛りを見かけることはほとんど無いと思われていました。

徳島県では徳島県田園環境検討委員会を設置し、県が行う農地改良などの工事について環境との調和を検討しています。私はその委員となっており、今年の5月に那賀川町の農地改良予定地を訪れオトギリソウの一種を発見し（図3）、7月に花を確認したところ、アゼオトギリとわかりました。現地は田の間をぬって流れている小さな用水路の縁で、土がむき出しになっていていろいろな草が生えているものの、手入れ（草刈り）がよくされていて日当たりが良く、約50ｍの間に30個体以上の生育が見られました。アゼオトギリ本来の自生地としては県下で最大級の群落で、盛んに開花して実を付けており生育状態も良好でした。

図2　アゼオトギリの花

アゼオトギリは県下の広い範囲で記録されているのでもともとは多かったのでしょうが、生息地がコンクリート化され失われたり、草刈りを止めたために日当たりが悪くなったりして個体数が少なくなったものと思われます。この植物を守るためには、環境を改変せず現在の状態をできるだけ残し、草刈りなどの昔ながらの管理が継続されるような仕組みを作らなければなりませんが、それには地元の方々の理解と協力が必要です。絶滅の危機にある植物を守るということは誰か一人の力でできることではなく、工事を行う側、地元や市民の方々、そして植物の専門家の三位一体となった協力が必要です。

（植物担当　小川　誠）

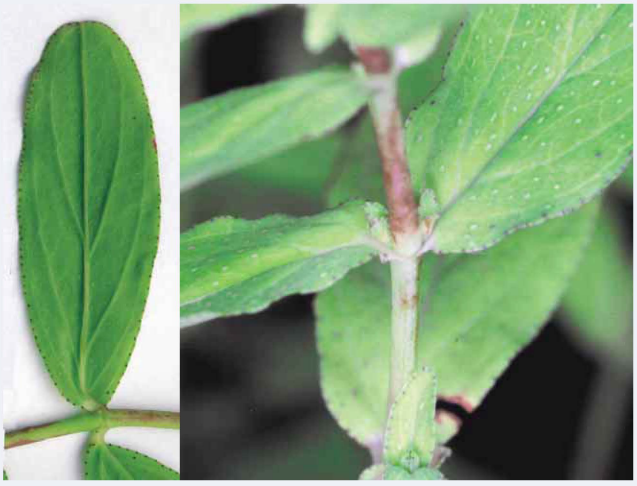


図1　アゼオトギリの葉の裏側（左）と付け根（右）

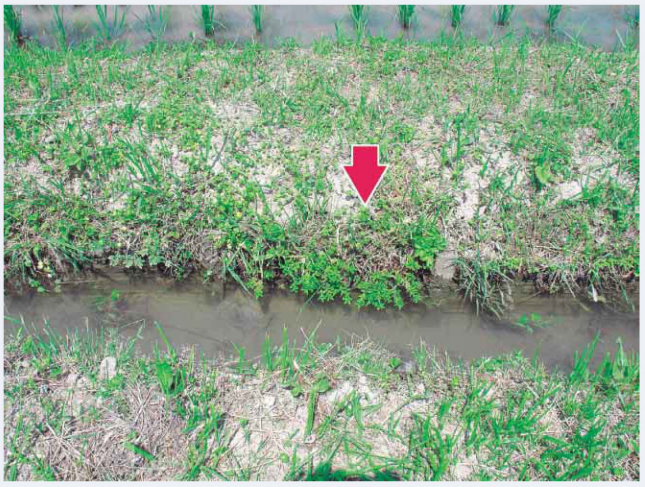


図3　那賀川町のアゼオトギリ（2004年5月）

情報ボックス

博物館と学校との連携

1　はじめに

現行の学習指導要領によると、総合的な学習の時間のねらいは、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」、「学び方やものの考え方を身につけ問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」こととされています。そして、各学校では具体的な学習活動を展開するにおいて「学校図書館の活用、…（中略）…博物館等の社会教育施設…（中略）…の積極的な活用について」工夫することとなっています。

このような学習指導要領の改訂を受けて、博物館を利用する学校が少しずつ増えてきています。博物館では、「博学連携」を進める立場から、以下のようなさまざまな取り組みを行っています。

出前授業の風景

2　博物館の学校教育支援事業

（1）出前授業

学校での授業に学芸員が講師として教室に出向きます。より詳しく子どもに教えたい、子どもの興味・関心を高め学習意欲の向上を図りたいといった希望がある場合、先生とのティームティーチングにより、博物館資料を活用して子どもの理解を深めるように支援します。

平成15年度は14校で合計19回（小学校16、高校1、養護学校2）実施しました。内容としては「火おこし」や「土器づくり」などが6回、「水生昆虫かんさつ」、「地層と化石」などが13回でした。今年度は10月末までに12校で合計17回（すべて小学校）実施しています。

（2）館内授業

理科や社会科学習で実物体験をしたり、総合的な学習の研究や調査をするときに博物館の展示物や資料を活用できます。希望により、展示されていない資料を見学してもらったり、学芸員による解説も行います。平成15年度は6校で合計8回（小学校6回、高校、養護学校各1回）実施しました。内容は社会科5回、総合学習2回、理科1回でした。今年度は10月末現在、小学校2校が利用しています。

館内授業の風景

（3）職場体験の受け入れ

総合的な学習の時間が各学校において定着するにつれ、かつては高校生が行っていた職場体験を中学生が行うことも珍しくなくなりました。博物館としても、申し出のある学校に対しては日程を調整しながら受け入れています。しかしながら、一度に多くの人数を受け入れることはむずかしく、その点は学校現場にご理解いただいております。

内容としては、化石のクリーニングや植物標本の作製と整理、普及行事の準備等を体験してもらっています。平成15年度は3校（高校2校、中学校1校）でしたが、今年度は4校（高校、中学校各2校）の生徒が職場体験を行っています。

（4）その他

以上の他にも、資料の貸し出しや教員研修の受け入れ、リーフレット作成・配布等を行い、可能な限り学校教育で博物館を利用していただこうと努力しています。紙面の都合上、詳しくはご紹介できませんが、徳島県立博物館ホームページ（http://www.museum.comet.go.jp）をご覧いただければと思います。

3　おわりに

博物館の学校教育支援事業の一部を簡単に紹介しましたが、十分にお伝えできなかった部分もあります。今後、今まで取り組んでいる事業の実績を評価し、さらに中身の濃いものに改善していきたいと考えています。皆様のご理解とご指導をお願いします。　（普及係：古東謙司）

レファレンスQ&A

どうやって虫の害を防いでいるの？

Q 先日、衣替えをしていたら、お気に入りの洋服が虫に喰われて穴があいてしまっているのに気がつきました。博物館にも衣装などたくさんの資料があると思うのですが、いったいどうやって虫の害を防いでいるのですか？

A お気に入りの服が虫に喰われてしまって残念でしたね。虫は体は小さいのになかなか侮れず、博物館でも大きな問題の一つです。

奈良の正倉院では、毎年気候のよい秋に、すべての宝物を点検する作業が行われていることは有名ですね。

博物館には、虫が好んで食べそうな材質の資料が数え切れないほど保管されています。小さなものものもあれば大きなもの、重いものもたくさんあります。実際には、正倉院の点検やご家庭の衣替えのように、１点ずつ点検するような作業は不可能に近い状態です。

そこで、博物館では、収蔵庫と呼んでいるスペースに入れる前に、資料についている虫やカビを確実に退治できるように、ガスを使って燻蒸という処理を行っています。

収蔵庫の温度や湿度は、資料ができるだけ傷まないようにするため、年間を通して安定した状態になるように空調で管理されています。おかげで、資料にとってはとても快適な保存状態が保たれているのですが、この環境は虫にとっても絶好の環境になってしまいます。ですから、このスペースに資料を運び込む前に、資料の表面についている虫やカビはもちろんのこと、資料の奥深くに潜んでいる虫の幼虫や卵までも一気に退治するために燻蒸剤（ガス）を使うのです。

ところが、これまで文化財用に使われてきた燻蒸剤の臭化メチルが、地球のまわりのオゾン層を破壊してしまうフロンガスの一種であるために、モントリオール議定書と呼ばれる取り決めにより、2004年いっぱいで製造と使用が禁止されることになってしまいました。そこで、これまでの燻蒸に代わるいくつかの方法が提案されています。

一つは，臭化メチルに代わる薬剤を使う方法で、何種類かが実用化されています。

もう一つは、薬剤を使わずに虫を退治しようとする方法で、二酸化炭素を使ったり、窒素などで虫を酸欠にして退治したり、低温や高温の温度によって退治する方法などがそれです。しかし、薬剤を使わない方法はカビにはまったく効果がないので、カビを退治するためには、少なくとも一度は薬剤を使う方法でこれまで同様に燻蒸する必要があります。

徳島県立博物館では、今のところ，植物標本の一部を低温処理に、また小型の資料の一部を窒素を使った脱酸素処理に変える準備を進めています。近い将来、さらに大型の資料への脱酸素処理の適用も考えています。

もちろん、日常的には、一般家庭の洋服だんすと同じように防虫剤や忌避剤などといった虫を寄せつけなくする薬剤も使用しています。

博物館では、地球環境や人体への影響も考え、薬剤を使う量をできるだけ少なくし、かつ効果的に虫やカビを確実に退治でき、多くの資料を次の世代に引き継ぐことができるように考えています。

（保存科学担当：魚島純一）

図１　オゾン層破壊物質を含むため、2004年末で使えなくなる文化財用の燻蒸剤

図２　窒素発生装置（中央の水色のもの）を使って箱に入った資料の殺虫処理をしているようす

1月から3月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか?

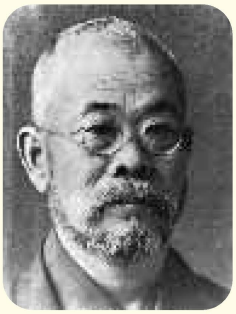
シリーズ名	行　事　名	実 施 日	実施時間	対象（人数）
野外自然かんさつ	貝化石のかんさつのしかた、標本のつくり方 1.野外観察と採集（高知県安田町） 2.標本づくり	2月20日(日) 2月27日(日)	13:30～15:30 13:30～15:30	小学生から一般(30人) ※1･2はセットでご参加ください
歴史体験	ベーゴマをまわしてみよう	1月23日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(30人)
	七草がゆをつくろう	2月13日(日)	10:00～13:00	小学生から一般(20人)
	古代の乳製品をつくろう	3月20日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(20人)
歴史散歩	国府町歴史ウォーク（徳島市国府町）	2月27日(日)	10:00～14:00	小学生から一般(20人)
ミュージアムトーク	阿波忌部とその伝承	1月15日(土)	13:30～15:00	小学生から一般(50人)
	わかりやすい化石学	3月27日(日)	13:30～15:00	小学生から一般(50人)
室内実習	ジグソー地図をつくろう	1月29日(土)	13:30～15:30	小学生から一般(20人)
	ミクロの世界 一電子顕微鏡で昆虫を見よう②	1月30日(日)	10:30～12:00 13:30～15:30	小学生から一般(各10人)
	落ち葉の中のいきものたち①	2月6日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(30人)
	ミクロの世界一電子顕微鏡で植物を見よう②	2月13日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(10人)
	落ち葉の中のいきものたち②	3月6日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(30人)
	軸物と焼物の取りあつかいと鑑賞	3月13日(日)	13:30～15:00	一般(30人)
	竹で遊ぼう	3月13日(日)	13:30～16:00	小学生から一般(30人)

◎ミュージアムトークは申し込み不要です。その他の行事は往復ハガキでお申し込みください。
（受付は各行事の1カ月前から。10日前必着でお願いします。）
◎午前・午後に分かれているものは，どちらを希望するか書いて下さい。
◎小学生の参加には必ず保護者が同伴してください。
◎行事の参加費は無料です。
◎お申し込み・お問い合わせは徳島県立博物館普及係まで。

部門展示（人文）「徳島水平社創立80周年記念　部落解放のあゆみ」

1922年に誕生した部落解放運動団体・全国水平社は、社会の差別意識を問い、日本の人権史上に一段階を画しました。そして、1924年12月には、徳島にも水平社運動の灯がともされました。

徳島に水平社が誕生してから80年目にあたる今も、部落差別は解消されていません。この機会に、部落解放に向けての取り組みの歴史を顧み、改めて私たちの課題を考えてみたいと思います。



喜田　貞吉
現在の小松島市出身の歴史学者。
部落史研究の先駆者でもありました。

期　間：2004年12月7日（火）～2005年2月6日（日）
※休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）、12月28日～1月4日
会　場：博物館2階　常設展示室内　部門展示室(人文)
観覧料：通常の常設展観覧料
（一般200円、高校・大学生100円、小・中学生50円）
※20名以上の団体は2割引。祝日は観覧無料。
土・日曜日及び冬休み期間中は、小・中学生、高校生の観覧無料。

展示の構成
1　部落問題の成立
2　部落解放の道程
3　喜田貞吉と部落史研究

博物館ニュース No.57
■発行年月日　2004年12月1日
■編集・発行　徳島県立博物館　〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL088-668-3636　FAX088-668-7197
http://www.museum.comet.go.jp